

定冠詞 the の研究

— その省略の傾向について —

沼 野 治 郎
平 田 脩

1. はじめに

An American writer on usage recommends that seekers after clarity and directness strike out all the *the*'s that the text can get along without. This is dangerous advice at a time when captions and slogans assail us from all sides and weaken in many of us the sense of definition.

— Wilson Follett, *Modern American Usage* 1966

江川泰一郎は、「日本人は英語の冠詞に対して神経質すぎるようだ。冠詞に対してコンプレックスを持って」と書いている。¹⁾確かに英文を書くに当たって、冠詞特に定冠詞の有無は、日本人泣かせの事柄で、細心の注意を払って点検しても、英語を母国語とする人に見てもらおうと、他の言いまわしはもちろん定冠詞の点で少なからず訂正を受けるのが常である。彼らは、身につけている慣用と母国語の直感から、当然われわれよりしっかりした判断ができるからである。しかし、定冠詞の使用は冒頭の引用文からもうかがえるように、英米人の間でも最近特に揺れており、問題となっている。そこでこの稿では、定冠詞の特性から掘り起こし、今日見受けられる定冠詞省略の傾向に主として焦点を当てて、微力ながら観察と解釈を試みようとするものである。定冠詞はもとより英語のどの項目についても、すでに先輩大家に

注1) 江川泰一郎『冠詞・形容詞・副詞の用法』研究社、1961年、3頁。

より究明し尽されているところであるが、われわれの小論を進めるに際し、旧知の部分に触れざるを得ないことと、同時に定冠詞のすべての用法、問題を網羅するものではないことを断っておく。

2. 定冠詞の発生

ギリシャ語を学んだ人は、定冠詞の変化から入り、それが名詞、形容詞、分詞にも通じるところが多く、格変化の基礎となっていることを覚えているであろう。その「頻繁な使用と自在さ、有効性は群を抜く」と泉井久之助は書いている。²⁾ 現代ドイツ語、フランス語を初めヨーロッパ語の多くにも定冠詞に性、格、数の変化がある。それに対し英語の定冠詞は単に the であるが、いつどのようにして発生し、今日の形になったのであろうか。

英語以外のヨーロッパ語には変化を持つ定冠詞のある言語が多いが、ラテン語、ロシア語にはなく、ギリシャ語でさえ「ホメーロスに到ってようやく萌芽が見える程度」³⁾ であった。そもそも初めからあったものではなかった。今日のロマンス諸語が古ラテン語から、そして今日のゲルマン諸語がゲルマン祖語から分かれて以後、これらの西ヨーロッパ語に生じたのであった。⁴⁾ そしていずれも名詞句の初めに置かれる要素として機能した。語源はゲルマン祖語 *de-/da- であった。⁵⁾

3. 古英語における定冠詞

古英語において指示代名詞 *sē*, *sēo*, *pæt* が強勢を失って定冠詞としても用いられるようになったのが、英語の定冠詞の始まりである。そして同じく三

2) 泉井久之助『ヨーロッパの言語』岩波書店、1968年、68頁。

3) 同上書、67頁。

4) Bynon, Theodora, *Historical Linguistics*, Cambridge : Cambridge University Press, 1977, p. 248.

5) *Ibid.*, p. 248.

人称の代名詞もこの指示代名詞から発達しており、この三者の間には関連が
あって、いずれも限定 (definite) の特性を持っている。⁶⁾その後中英語の初
期に se, seo の s- が類推により他の形の語頭の spelling p- に変わり、次いで
中英語の後期頃までに pe が他のすべての性、数、格を代表するようになり、
それが今日の屈折しない the となったのであった。そして「普通の散文で、
近代英語における定冠詞の用法の確立したのは16世紀頃⁷⁾である。

定冠詞が指示代名詞から出ているとすれば、その2つの間にどのような区
別があるのだろうか。アレクサンドリアの文法家アボルローニオスは次のよ
うに説明している。「指示代名詞が聞く人の感覚に対して現前の対象を感知
させる (視覚的指示をする) 働きを持つに対し、冠詞は対象が聞く人の意識
においてすでに知られているものとして叙述する (意識における指示をする)
ものである。」⁸⁾これは古英語についても言えることであろう。

定冠詞は名詞の前に置かれ、これに属するような関係にあり (後接語。
proclitic), 16, 17世紀の文法家が見ていた単なる名詞の標識としての機
能⁹⁾しか持っていない面もある。

古英語における定冠詞の用法は、発生の経緯からもうかがえるように、大
変指示代名詞的なところがあり¹⁰⁾、指示性をかぶせたいときには、固有名詞
にも使われるなど、現代英語の用法とは相当異なっていて、その使用に一貫
性がなかった。ヒュー・ウィルキンソンは、se の定冠詞としての使用は、
大衆の話し言葉から始まったので、文語的文書より、口語的に書かれた文書
に多く用いられている印象を受けると述べている。¹¹⁾ いずれにしても古英語

6) Lyon, John, *Introduction to Theoretical Linguistics*, Cambridge :
Cambridge University Press, 1971, p. 279.

7) 大塚高信編『新英法辞典』三省堂, 1959年, 301頁。

8) 泉井, 前掲書, 95, 96頁。

9) 渡部昇一『英文法史』研究社, 1965年, 132, 246-247, 275頁。

10) 小野茂, 中尾俊夫『英語史 I』大修館書店, 1980年, 312頁によれば, se の指
示代名詞の用法と定冠詞の用法の間の区別は, 話し言葉には強調の相違として存
在していたかもしれないが, 書き言葉に関する限り, 表わされていない。

11) Wilkinson, Hugh E., *The How and Why of English*, Kenkyusha,
Tokyo, 1977, p. 85.

における *se* の定冠詞としての使用は、文書に残されたものを見る限り、今日の英語と比べると大変少ない。¹²⁾

4. 発音面から見た観察

上述のように古英語の指示代名詞の最初の2つの形 *sē*, *sēo* は、中英語初期に類推により *pe*, *peo* となっている。定冠詞は、固有のアクセントを欠き、後続する語に支えられてその一次語とアクセント単位を構成する後接語 (proclitic) である。それで中英語後期までに *pat* を除いて、男性、単数、主格以外の形はいずれも語末の子音を消失し、母音が弱まって *pe* で定冠詞は代表されることになった。¹³⁾

そしてその発音について見れば、「強形の [θe:] は15世紀末に母音の [e:] が [i:] となり、今日の定冠詞の強形の母音となっている。[i:] が短く弱化されて [i] となったものが今日母音の前に用いられ、他方中英語の弱形 [θe] から今日子音の前に用いられる [ðə] の形が生じている。」¹⁴⁾ 語頭の子音 [θ] が [ð] と有声化したのは Jespersen が Verner's law in English と呼んでいる音声変化に基づく。¹⁵⁾ これを図解すると次頁ようになる。

次に現在母音の前で [ði] と発音されることについて考えてみたい。定冠詞はそのものの発音としては強形があるものの、実際に文中で使われるときは、強勢を受けず速い話し言葉では [ðə] が子音 [ð] だけになることもしばしばである。このとき子音で始まる語が続くときは、the school [ðskú:l] というふうに耳に聞こえてくる発音上何ら問題が生じないが、母音で始まる語の前で [ð] だけが加わると、ð と次に続く名詞あるいは形容詞の語頭の

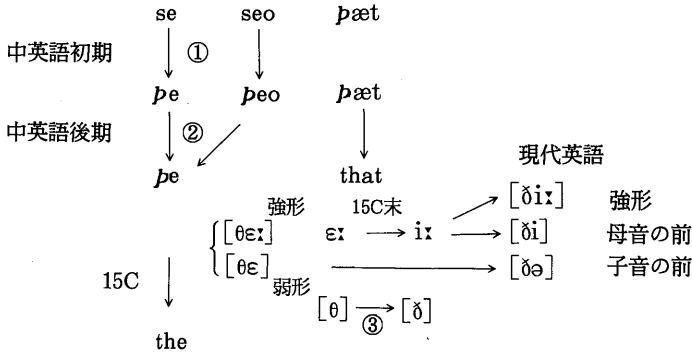
12) アルバート・C・ボー、トマス・ケープル著、永嶋大典他訳『英語史』研究社、1981年、72-74頁。

13) Robertson, Stuart, *The Development of Modern English*, Englewood Cliffs, N. J. : Prentice-Hall, Inc., 1934, pp. 130, 131.

14) 大塚、前掲書、301頁。

15) 同上書、301頁。

図1 定冠詞の発音の変遷



註 ① se, seo 以外の形が皆 þ で始まっているので類推により。

②定冠詞は stress を受けないので, þæt を除いてすべての形が語末子音を消失し, 音が弱まって pe で代表されることになった。

③イエスベルセンの「英語におけるヴァーナーの法則」による。

母音が一つの音節を形成して、結局次の語が異なった新しい単語のように聞こえて紛らわしくなる。例えば the apple は th' apple 「ðæpl」となる。このことについてブライアン・フォスターは、「もし子供たちを放任したならば、いい気になってシェークスピア流に th' apple と発音しかねない」¹⁶⁾と書いている。そこで、母音の前では、強形を短くした [ði] と発音することによって、音節上次の語が影響を受けないで、耳で区別できるようにしたものと考えられる。

今では母音の前の th' は普通用いられないが、エリザベス朝の英国においてはこれが多く行われていた。シェークスピア、マーロウ、ベン・ジョンソ

16) Foster, Brian, *The Changing English Language*, London: The Macmillan, 1968, pp. 248, 249. このすぐ前の英文を吉田弘重は、「しかし、彼らがこのような発音をしないほどこの発音はしっかりと子供たちのなかに浸透している」と訳しているが、正確には「この発音は慎重に子供たちに浸透させなければならぬようだ」と訳すべきである。

ン、ミルトンなど。¹⁷⁾ イェスベルセンによれば13世紀頃からこの現象が発見されるという。¹⁸⁾ これは今日でも古典的な詩や俗語、方言、例えばロンドン俗語 (Cockney English) やアメリカ南部の方言¹⁹⁾ で見られる。

ブライアン・フォスターは定冠詞の発音に関して見られる現象の一つに、伝統的発音よりも綴字発音に向かう過剰訂正 (hypercorrection) の傾向の例として、the を thee と発音する変容があることを述べ、これは伝統的発音を破壊するものと嘆いている。²⁰⁾ 「正にその…」と強調するとき [ðɪ:] となるが、この傾向はほとんどどんな場合の定冠詞にも用いられる言い方で、特に定冠詞の次にどんな語がくるか判然としないときに用いられる。

また定冠詞の音韻変化に、同化作用の結果 at the best, at the least, at the bottom が at the > atte > at と変化して、at best, at least, at bottom となったことをあげることができる。²¹⁾

単音節の語が語調に与える影響について、イェスベルセンは興味深い観察をしている。単音節の語は二音節の語より歯切れのよさ、力強さを備えているという。例えば 'Thank you.' より 'Thanks' の方が荒削りな感じを与えること、'First Come, first served.' の歯切れよさなど。しかし、すべての単音節語が力強い響きを与える訳ではない。短い語の多くはまったく強勢を受けず、接頭辞、接尾辞のようにしか聞こえないからである。この点を埋め合わせるため定冠詞が姿を消すことがあるという。例、'life is short.', 'dinner is ready.', 'school is over.'²²⁾

17) 後二者の韻文に多い。例えば「失樂園」では約2:1の割合で th' になっている。韻文に多いのは韻律を合わせるためである。しかし、1611年の欽定訳聖書には詩篇にもその例が見受けられない。

18) 大塚, 前掲書, 300頁。

19) Morris's, William and Mary, *Harper Dictionary of Contemporary Usage*, New York: Harper & Row Pubs., Inc., 1985.

20) Foster, *op. cit.*, pp. 247-249.

21) Jespersen, Otto, *The Philosophy of Grammar*, London: George Allen & Unwin Ltd., p. 110. 小稲義男『冠詞・形容詞・副詞』研究社, 1958年, 30頁。

22) Jespersen, Otto, *Growth and Structure of the English Language*, Oxford: Basil Blackwell Publisher, 1905, pp. 5-7.

5. 英語の変遷の観点からの考察

西ヨーロッパのロマンス諸語、ゲルマン諸語に共通して見られる特徴の一つに、形態法の簡素化があるが²³⁾、とりわけ英語はその度合いが著しく、他の言語例えばドイツ語などとは比べものにならないくらい徹底して屈折方式から分析的言語に変容している。そして機能語を使用し、もっぱら統語法に依存する言語になっている。

この英語の簡素化について泉井久之助は、「言語を使用する主体が、激しい歴史の回転を蒙ってきたことも理由として考えられる。しかし、……言語史のある時期に言語の使用に一般の人々が無造作であったことも大きい原因である」と見ている。²⁴⁾この大衆からの簡素化は必ずしもその言語の墮落を意味するものではなく、むしろその変化の過程の背後に「より精密な表現への欲求が強く働いて」²⁵⁾行われたのであった。そこでこの簡素化の意義は、知的な方向にむかっての効率的な整理が進んで、表現が客観的、論理的になり、緻密な思索を導くに足る言語²⁶⁾になったことと見ることができる。

この変遷の結果、機能語が大きな役割を果たすことになり、機能語の一つである定冠詞もしたがって重要性を増し、今後使用が減少することはないのではないかと考えられる。しかし、屈折が消失し、統語法が発達したのは、前置詞の発達、語順の確立、連結詞（接続詞、関係代名詞）が発達して文構造が整ってきたこと、助動詞が利用されて時制や法の細かな区別が表現されるようになったこと、動名詞や不定詞が英語の表現力に大きく寄与するようになったこと²⁷⁾、によっている。定冠詞は機能語の一つであるが、それ自身の意味は僅かしか担わず、empty word（虚語）とさえ呼ばれて、強い拘束力は持たず、英語の変遷の結果必ずしも重要性を増した語と見る必要はなさ

23) Bynon, *op. cit.*, pp. 248, 249.

24) 泉井, 前掲書, 212頁。

25) 中島文雄『英語発達史』岩波書店, 1953年, 164頁。

26) 泉井, 前掲書, 218, 219頁。

27) 中島, 前掲書, 164頁。

そうである。ただ、現代英語では定冠詞の用法が複雑に発達しており、その有無が細かいニュアンスの違いを表わしているため、今後省略の傾向を増すのか、重要性を増していくのか以下の節で見ていくことにする。

6. 統語上の制約と意味の与える影響

統語法に依存するようになった英語の定冠詞を含む名詞句の例を3つあげてみる。

- (1) the + 序数詞 + 普通名詞 the first student
- (2) the + 唯一物 the sun
- (3) the + 名詞 + of-phrase the influence of his paper

この3つの例は、統語上最初に定冠詞が自動的におかれる例である。しかし、定冠詞にすべきか不定冠詞にすべきかの区別は、文法（統語）関係だけで決まるのではなく、意味によって決まってくることもある。²⁸⁾ 定冠詞づきの名詞句の外部照応の機能にしても、一部は定冠詞に負っているが、一部は語義を媒介にしている。²⁹⁾

続いて他の例を見てみよう。

- (4) A jet plane crashed in Yokohama six years ago. ……The incident occurred in a residential area in the port city. [Asahi Evening News. Cited in Okano.]
- (5) Tsuneari Fukuda is the translator of Shakespeare.
- (6) Tsuneari Fukuda is a translator of Shakespeare.
- (7) Mr. Tanaka is the vice-president of the company.
- (8) Mr. Tanaka is a vice-president of the company.
- (9) The great Napoleon found the Rosetta stone.

28) Crystal, David, *Dictionary of Linguistics and Phonetics*, Oxford : Basil Blackwell, 1985, p. 22.

29) 岡野哲『英語学の基本』篠崎書林, 1985年, 144頁。

(10) Great Napoleon found the Rosetta stone.

(11) Mr. B is Irishman first, critic next. [Kruisinga. Cited in Koine.]

(4)の the port city は単に the city であっても前方照応によって「横浜」を指す。しかし、ここで‘the provincial city’とか‘the port area’となっていれば、the があっても「横浜」と照応させることはできない。³⁰⁾ すなわち語義も大きな役割を果たすことがわかる。(5), (6)では the がつけばもとも権威のある、有名なシェークスピアの翻訳者ということになり、a では幾人もいる中の1人ということになる。(7), (8)では、the であれば副社長は1人ということがわかり、a であれば2人以上いることがわかる。(9), (10)で主語に the があれば、客観的で冷静な感じを与えるのに対し、the を除いて great Napoleon とすれば、彼に対する賛美や崇敬の気持ちで形容詞をつけたことになる。³¹⁾ また(11)で Irishman と critic が無冠詞で補語に立っているのは、形容詞的な性質がとくに濃厚だからである。³²⁾

定冠詞の使用に関しては、多くの規則が定まっているが、上記の僅かな例からも決して統語関係から自動的に決まってくるものではないことがわかる。意味によって冠詞の有無、定冠詞を用いるべきか、不定冠詞を用いるべきかが変わってくる。逆に言えば、冠詞の有無、定冠詞か不定冠詞かによって意味がときに微妙に、ときに大きく異なってくるのである。

また意味を把握するのに、一つの文の統語法を超えて、談話の単位で分析する必要があることにも注目すべきである。³³⁾ ただ本稿では広い文脈から及ぶ意味の影響に言及するにとどめておく。

30) 岡野, 前掲書, 143-144頁。

31) 小稲, 前掲書, 48, 49頁。

32) 同上書, 79頁。

33) 例えば, 伊藤弘之, 隈元貞広『文学テキストの分析を中心とした英語学概論』篠崎書林, 1982年。このような観察において, 当然定冠詞もその分析の一翼を担っている。68頁。

7. 定冠詞省略の傾向

泉井久之助は、英語の定冠詞について次のように述べて、最近定冠詞の使用が次第に少なくなっていることを指摘している。抽象性を帯び影が薄いところがある英語の定冠詞は、性、数、格の制約から解放されている一種の自由冠詞であって、着脱は自由であり、その使用に文法的な強制がなく、散文では冠詞の不在は理解に障害をきたさず、その使用不使用は文法的というより、文体的な性格を高めてきた。これは英語以外のヨーロッパ語では自由度が低く脱落が困難なのとは大いに異なるところである。³⁴⁾

頭部省略 (prosiopesis) の現象について小稲義男が、「発音の労力節減」という「万人共通の本能」による³⁵⁾としているのは興味深い。この方向が冠詞の反復を省略させ、or (すなわち) の後でも反復を略させるのであろう。

例 This ban (the disapproval of South African journalists' covering the Games in Los Angeles) offends the Olympic spirit, American policy and perhaps even American law. (The New York Times, July 20, 1984)

Would-be college students cram for the SAT, or Scholastic Aptitude Test. (Jim Knudsen, "What's News", Nan'un-do, 1985)

また、対句や列挙などにおける無冠詞も発音の労力節減に通じ、同時にイエス・ペルセンが言う単音節の強い語調を保つことにつながると考えられないだろうか。例 day and night, man and wife, from door to door.

この節では以下(1)昔は定冠詞をつけたが今はつけなくなったもの、(2)定冠詞の使用不使用の慣用法 (usage) が揺れているもの、(3)最近省略の傾向があるもの、慣用法の執筆者が懸念を抱いているもの、とくに新聞雑誌に見られる傾向について、順次取り上げていくことにする。

(1) 昔は定冠詞を使用したか、今は無冠詞となったもの。

34) 泉井, 前掲書, 100, 214頁。

35) 小稲, 前掲書, 86頁。

1) 学問, 学科, 技術, 遊戯名。16世紀の the Mathematics, the Metaphysickes や他に the chesse, the dressmaking, the currying の例が OED に見られるが今日では無冠詞である。

2) 国語名。昔は国語の名前に the がかぶせられていた。例 1760 Let not your studying the French make you neglect the English. (OED)。今では略された表現において見られるだけである。例 from the German (language or original)。

3) 以前は河川, 山, 島嶼, 地域名(複数)に今より広範に定冠詞が用いられていた。今日では記述的であると感じられるとき, 例えば the Land's End, the Lizard あるいは伝統的に the を伴うものときだけつけられる。(OED)。

4) 以前はときに抽象名詞にも定冠詞が使われていた。例えば古英語, 中英語で, また16世紀に至るまで the death の形がしばしば見受けられる。Ex. 1594 SHAKS. I lay it naked to the deadly stroke, And humbly begge the death. また life が「生き写し, そっくり」の意で次のように使われている。1607 It doth shew So neere the life as it were naturall. 1825 LAMB Elia. They please by being done under the life, or beside it; not to the life. (この項いずれもOED)。

5) 駅名にはもと the をつけたが, 今は無冠詞が普通。

以前 The Grand Central Station, the Washington Union Station (小
稲, 40頁)。

今日 Grand Central Station is famous all over America for how busy
it is.

The Shinkansen leaves from Tokyo Station every 15 minutes.

(後2例, 熊山晶久「英語冠詞用法辞典」1985年より)

6) 慣用句となっている前置詞句の一部。例えば, at length, at first sight, in favour of, on behalf of, in behalf of, by means of は, 1300年 He Kneu pam at pe first sight. などいずれも14, 15, 16, 17世紀の例に

the をかぶせたものが見られる (OED)。シェークスピアに at the least (Wiv. I V. vi. 6), at the last (Shr. V. i. 130-1) の形が, 聖書にも at the first (John xii 16), at the length (Prov. XXIX 21) の例が見られる。

7) 副詞の最上級 most など。

The greatest men are not those who “Despise the day of small things,” but those who improve them *the most carefully*. — Smile’s Self-Help.

His friends were those of his own blood or those whom he had Known *the longest*. — Stevenson, Dr. Jekyll and Mr. Hyde.

この2例に見られるように, 副詞の最上級に the をつけることがあったが, 今日ではつけないのが普通である。斉藤秀三郎「新標準英文典」1951年の記載にもついておらず, 江川泰一郎が中学のリーダー5種を調べたときにも一冊にもついていたものはなかった(1961年, 江川, 61, 62頁)。今日の教科書も the はついていない。

最近の一例

What impressed me first of all, and most of all, was the repeated emphasis on “safety” in all these racing journals. — Sydney J. Harris, “Happiness in Marriage”, Nan’un-do, 1975.

(2) 定冠詞の使用, 不使用の慣用法が揺れているもの。

1) all と both が名詞を修飾するとき, 定冠詞はときどき省略される。

例 I was busy all (the) morning. 米では the が省略される(金口儀明「英語冠詞活用辞典」1970年, p. 160)。

Both (the) children are good at maths.

2) 船舶, 劇場, 公共建造物の名前の前の定冠詞は省略されることがある(OED)。船舶では the Queen Elizabeth, the Soya, the Titanic, 劇場では the Globe Theatre, the Playhouse, 建物では the British Museum, the White House, The Empire State Building, the Pentagon のように通常 the がかぶせられる。

しかし、船舶や航空機、宇宙ロケットの名前を、CSS Shenandoah, SS United States, Spirit of St. Louis, Voyager 2 (The Chicago Manual of Style, The University of Chicago Press, 13th Ed. 1982), 町の主要な建物を Cambridge Polytech, Westminster Abbey, Bognor Town Hall, Birmingham Airport (Michael Swan, Practical English Usage, Oxford, 1980) と定冠詞なしで呼ぶことも行なわれている。

3) 月日 (例 April 1) の読み方。年月日を定冠詞を入れて読むか入れないかは、日付が序数詞で読まれるにもかかわらず、慣用法が今日割れていて、無冠詞が優勢である。例えば、Voice of America のアナウンサーは無冠詞で読んでいた(1987年3月30日、4月1日聴取)のに対し、ABC (Australian Broadcasting Corporation), BBC (British Broadcasting Corporation) のアナウンサーは、それぞれ1986年9月11日、12日に何度も定冠詞付で読んでいたことをあげることができる。また1960年、1967年改訂版の木村明「英文法精解」でまれに the を省いて読むとあるのに、今日では中学、高校のリーダーの読み方の指導で無冠詞になっている。

4) 病院。「入院」「退院」「通院」などの意味で前置詞 in, out of, to などと結びついて無冠詞の場合がある。例えば He was in hospital. しかし、まだ school や church の場合ほどには固定していない(小稲, 75頁)。これは慣用句になる移行の段階にあるものと見ることもできるかもしれない。

5) 病気の名前。病名には以前 the がつけられたが(例 the cholera), 今日では無冠詞が普通である(小稲, 72頁)。OED も同様の記載であるが、1986年に出た Supplement には定冠詞使用の例も依然として並んで観察されると記している。そして、口語的ないしはおどけた言い方の the blues, the collywobbles, the creeps に使用されると例をあげている。熊山晶久も病名に関して a, the, 無冠詞の3つに分類して整理している(562-567頁)。しかしそこでもやはり asthma, cancer など無冠詞の例が一番多くなっている。

最近恐れられ、注目を集めている AIDS も無冠詞である (Time 誌, Nov. 3, '86, Feb. 16, '87)。この語は Acquired Immune Deficiency Syndrome

の略であるから、一次語の Syndrome を先行の3語が修飾していて、the を伴ってもよい筈である。例えば、The China Syndrome, the withdrawn scholar syndrome, the Peter Pan Syndrome など修飾語がある時 the がかぶせられている。頭字語 (acronym) になっても最後の例 (Dan Kiley, The Peter Pan Syndrome, 1983) では PPS が the を伴う場合と無冠詞の半々となっている。にもかかわらず AIDS は一貫して the をとっていない。ここにも無冠詞の傾向が感じられる。尚、complexを一次語とする複合語も The Cinderella Complex (Colette Dowling による著書の題, 1981年), the Oedipus complex (The Concise Columbia Encyclopedia, 1983年) のような例もあるが、無冠詞の Oedipus complex, inferiority complex, Electra complex の方が多くなっている。

6) 官位, 称号。高位の肩書には定冠詞を付す (OED, Chicago Manual p. 190)。例 the King, the president, the chief justice. しかし、この項について OED Supplement '86 は informal use では通常省略されるとしている。また OED の方に、今日では名前が続くときには無冠詞であることが記されている。King George, Queen Elizabeth, Prince Charles 等。ちなみに英語国民にとって聞き慣れない語には the Reverend Edward Smith, the Emperor Meiji のように定冠詞をつけること、これらも今日では無冠詞の傾向があることに注目すべきである。

7) 人名が肩書または普通名詞と同格に置かれるとき。

例 Mrs. Twentyman, (the) wife of a leading local businessman, was fined £50.

Margaret Mitchell, (the) author of Gone with the Wind, is a famous writer.

このように人名が of-phrase を伴った普通名詞または肩書と同格に置かれるとき、the を使用する場合と使用しない場合がある (熊山に用例豊富)。文脈やその人物と肩書ないし名詞との関係によって、a, the, 無冠詞に分かれ得るが、今日無冠詞が原則で、断然多く見受けられる。

また E. S. C. Weiner 編の Oxford Guide to English Usage 1983 は、次のような例で定冠詞をとる方が望ましいと保守的見解を述べている。

Nansen, (the) hero and humanitarian, moves among them.

(The) Best-selling novelist Barbara Cartland……

しかし、われわれが最近の出版物を見る限り無冠詞が圧倒的に多い。

8) 総称的用法 (Generic use)。

Ⓐ A dog is an animal.

Ⓑ The dog is an animal.

Ⓒ Dogs are animals.

この3つの中、定冠詞を使ったⒷの言い方がもっともよく総称の意を表わすが、抽象性を備え、文語的で、普通Ⓐ、Ⓒの方が多く用いられ、Ⓒが口語的で一般的な表現法としてもっとも広く用いられている(小稲, 22-23頁)。この傾向も定冠詞離れの現象と解することができる。

(3) 最近省略の傾向があるもの。慣用法の執筆者が懸念を抱いているもの。とくに新聞雑誌に見られる傾向。

1) 普通名詞が肩書きのように扱われ、固有名詞を無冠詞で従える表現。

例 Author Capote, banker John Johnson. 名詞が2つ並んで主たる要素である普通名詞を人名が同格語として限定するので、定冠詞がついてよい場合である(小稲, 36頁)。例 the poet Virgil (OED). しかし、アメリカで普通名詞を真の肩書のように見なして無冠詞の語法が広く行われている。

2) 物語、記事の冒頭の the の省略。新聞英語の定冠詞省略のもっとも頻繁な例として、Bernstein³⁶⁾, Copperud³⁷⁾ は記事の冒頭の the, 更にはそれが推し進められて、普通の文頭の the も省略されることを指摘し、その傾向に警告を発している。

36) Bernstein, Theodore M., *The Careful Writer*, New York : Atheneum Pub., 1965, p. 50.

37) Copperud, Roy H., *A Dictionary of Usage and Style*, New York, 1964, p. 394.

例 Outcome of some of the conventions can be gauged in advance.
(Cited from Bernstein)

Crux of the situation is belief expressed by board members that legislation should govern the use of the reservoir by the public. (Cited from Copperud)

3) 文中の of-phrase における省略。上記の傾向が更に進み、文中の of-phrase にも the が略されることを Bernstein と Follett が指摘し嘆いている。

例 [the] appointment of a new sheriff (Cited in Follett)

This is a contribution to [the] history of science. (annunciatory *the* の略, 同上)

Follett は, in view of, in respect of, in pursuance of, in sight of, in face of など in で始まる導入の句において、後続語句が限定の意味を持つときは、やはり定冠詞を使用すべきであると、無冠詞論者の傾向に釘をさしている。³⁸⁾

4) 特定の語彙の例。police の前の定冠詞を落とすことは, a special journalistic eccentricity と Bernstein は手厳しい。State and church are separate. と言うのと同じ一般的概念では、無冠詞で使い得るが, Mr. K told police that……という文脈では, the は欠かせない, 口頭で言うときは必ず入れるであろう, と指摘している (Bernstein, p. 51)。また Copperud は the Supreme Court, the Cabinet, the Senate と言うにもかかわらず, Congressは現在無冠詞になっていることをあげている。

5) 出版社など機関の名前。Follett は最近出版機関が the を落として Columbia University Press のように自称する傾向を憂えている。企業体は自分の名前を決める自由があるが, The work is published by Oxford University Press. と聞くと何かが不足しているように聞こえるではないか。これ

38) Follett, Wilson, *Modern American Usage*, New York : Hill & Wang, Inc., 1966, p. 41.

も the の意味に対する人々の意識を弱めるものだと述べている (Follett, p. 41)。

6) 新聞、雑誌の見出しにおける無冠詞。これは紙面の制約と簡潔さを求める特殊な事情から、今に始まることではないが、本文を読まないで省略のため見出しだけでは意味が取りにくいことがあり、またこの冠詞省略は、記者と読者の両方に広範な影響を与え、普通の文にまでその傾向が及んでいる。

以上の journalism に見られる定冠詞省略の傾向について、必ずしも簡潔になって読者の読む速度を増すことにはならない。むしろ間隙を埋めるため止まって考えさせることになり、逆効果を生む、と Morseberger は述べている。³⁹⁾ また Bernstein は定冠詞省略を the disfigurement of the language と呼び、そういった傾向の雑誌が大量に販布されると若年層に大きな影響があって危険であると懸念している。そして、名詞の前に冠詞が必要なときには犬に尾が必要なのと同じで、除去すると傷付くと表現している (Bernstein, pp. 50, 51)。Follett は統語法と意味を無視し、機会さえあれば the を略して簡潔と力強さに走ろうとするなら、英語を pidgin の一種にしてしまうことになることさえ断じている。そして穏健な Copperud は、あった方がよい the を除くとき、われわれは知っていてそうしているのであって、決して偶然に落とすのではない、と述べている (Copperud; p. 395)。

このようにアメリカの usage writers が声を大にして警告を発している以上、それだけ定冠詞省略の傾向が活字メディアで顕著であったのに違いない。また現に今もその傾向がなくなっていないのであろう。われわれが観察した範囲でも 1) 普通名詞が肩書のように扱われ、無冠詞で人名を従えている例。3) of-phrase で限定が読み取れる場合でも無冠詞の例。4), 5) の例を傾向として確認することができた。しかし、2) の物語や記事の冒頭での省略は、限られた探索ではあったが、例に行き当たらなかった。また、目立

39) Morsberger, Robert E., *Commonsense Grammar and Style*, New York: T. Y. Crowell, 1965, p. 148.

つほど慣用語法の逸脱と認められる冠詞省略で満ちた記事もなかった。

8. 結語

冠詞の用法を丹念かつ豊富に調査して便利な辞典を著わした熊山氏は、英語の冠詞が日本語の「は」と「が」によく似ていると述べているが、同感である。結局定冠詞の使用不使用が決まるのは、およそ単一の文法規則によるのではなく、統語法上の規則、文脈・談話の単位からくみ取れる意味、慣用法、それに文体という4つの要素からである。

個人によって異なる style が冠詞使用の決定要素に入ってくるのは、意外な感じがするが、形態法上簡素化された英語では着脱自由なため生じることである。例えば、少し古いが John Stuart Mill は定冠詞を多用する人であった。⁴⁰⁾ また日本人は定冠詞を使いすぎる傾向があったと江川は例をあげて述べている。⁴¹⁾

定冠詞使用不使用の傾向について見れば、古英語において *se* の定冠詞としての使用は口語から発達し、後に英語の屈折消失に力を貸した大衆は、定冠詞の複雑な発達にも役割を果たした筈である。そしてまた現代英語において定冠詞省略の傾向が、口語、俗語から起こって再び大衆によって定冠詞は姿を消す方向に向かっているのであろうか。英語は今日世界にあって文字通り *Lingua Franca* としての役割を深めている。ある *usage writer* は、難民や流浪の外国人が過去四半世紀に亘って、無意識に冠詞抜きの見出し文体まがいの英語を使用するので、英語を母国語とする国民にも影響を与えている、と述べている。⁴²⁾ これは冠詞を持たない日本人もつい無冠詞になりがちであることを考えれば人ごとではなくなってくる。英語の国際化が一種の大衆化の作用を及ぼしていることは否定できない点であろう。Journalism の無冠

40) 伊藤, 隈元, 前掲書, 187頁。

41) 江川, 前掲書, 16, 17頁。

42) Follett, *op. cit.*, p. 36.

詞の傾向も「今日の英語の激しい改新と構造の簡単化」を促す方向にあることは首肯できよう。

この流れを止めようと manuals of style, usage の本が発行され、usage writers が警告の声を発している。そしてある本は序文に次の文を引用している。⁴³⁾

Tongues, like governments, have a natural tendency to degeneration ; we have long preserved our constitution, let us make some struggles for our language. — Samuel Johnson, Preface to his Dictionary
1755

Copperud は、the はない方が読者のためになるという考えは幸い支持を失っているようだが、消え難い流言のごとく the に対する偏見、無視の気配がそこそこに残っていると警戒を緩めていない。⁴⁴⁾

そこで現状は、片方に簡素化の勢いが猛烈に襲いかかって、degeneration, anarchy の状態が進行しつつあり、他方それに対してこれを憂える人々が流れを食い止めようと懸命になっているとすることができる。それで結局首尾一貫しない arbitrary な用法が今日もっとも顕著になっている、ということになる。⁴⁵⁾

われわれが新聞雑誌をしばらく観察した限り、定冠詞はあるべき所に置かれ、the は alive and well という印象を持ったが、やはり無冠詞の例、arbitrary な使用にも気づいている。the に「親しみ」「制限（限定）」「特殊化」「具体化」の作用があつて⁴⁶⁾、その有無や、a か the かが大きな意味の違いをもたらす以上、省略の傾向に対する警告の聲が今後もますますあげられることであろう。

ただ結語としては、英語の定冠詞 the が自由冠詞である以上、Christo-

43) Tibbetts, Arn, Tibbetts, Charlene, *What's Happening to American English?* New York, 1978, ix.

44) Copperud, *op. cit.*, p. 394.

45) Follett, *op. cit.*, p. 38.

46) 一色マサ子、『冠詞』研究社、1954年、92-93頁。

phersen, 一色, 泉井も見ているように, 大きな流れの観点からはやはりその使用が少なくなっていくことが予想される。一方に the を thee と読む過剰訂正や, アメリカ人が副詞の最上級, 季節, hospital に the をつける archaism も見受けられるので, 傾向や統計的要素といった面を持つ言語のこの定冠詞の行方を今後も観察し続けてゆきたい。

付記。本稿は, 着眼の段階から資料の収集, 観察, 解釈, 結論の判断に到るまで, 沼野と平田の2人が終始協議し進めた共同作業によるものである。